

フェイトン號の航海日誌

小 野 三 平

長崎博物館珍藏の、フェイトン號の航海日誌を親しく見せて頂いたのみならず、國友博士や、増田圖書館長の御好意で手寫する事を許して頂いたのは、誠に仕合せの事と感銘深い次第である。其間、連日門限から門限まで御邪魔した博物館の方々にも、色々の意味で御厄介をかけた事を此の機会に御禮を申述べ度い。

フェイトン號長崎を掠むと、歴史の本によく書いてあるが、果して掠めたのか、掠めなかつたのか——何れにもせよ一體此のフェイトン號はどこから來て、長崎を出た後はどこへ行つたのだらう？其の航海の模様と當時の艦内生活の有様など詳細に知り度い慾望と、もう一つの理由は、何分にも経る年處は争はれず、日誌中隨處に判讀に苦む程にインキの色褪せて早晚、全く消え去るページも出來るだらうと思へば、可惜國寶級の此の寶物が亡びるのを座視するに忍びんやと、義氣一番やり始めては見たものゝ、之れは仲々の大仕事で、二ヶ月も三ヶ月も長い日數を費して成就すべき筈なのに、餘り短期間に無理をしたので寫し了へてから二週間以上を経た今日まで、毎夜毎夜航海日誌の夢が続くところを見ると餘程疲れたのだらう。

本日誌は、乗組のストックテールと云ふ一士官が、本艦備へ付けのものから毎日々々根氣よく寫したので、千八百八年

の七月九日に始まり、翌年の九月十四日に到る約十四ヶ月分で、其の始まりは本日誌の記者ストックテール大尉の恐らく乗艦地で有つたらうと察せられるマドラス（印度東南岸に在り）出帆の前日から始まつてゐる。

當時、東印度會社船の船長は勿論士官達も仲々其の地位を得る事難く、激しい競争、難しい學術試験も突破しなければならなかつた、随つて専ら貴族若くは其類縁が之を占むる習ひだと云はれるのに、更らに一段と格式の高い軍艦ではあり、多年の宿望を達してフェイトン號乗組を拜命したのだから、彼ストックテールの得意とするに易く、雄心勃勃少壯士官の血は湧いたであらう。

海軍士官でも、商船士官でも常に航海して位置と氣候風土の推移を繰返へす者の嗜として、自家の航海日誌を作るべきだと訓へられてゐる。海の人には航海日誌が陸上人の普通日誌に相當するのだから、昨年一昨年と同じ日にはどの海に居たとか、前回と今回とベンガル灣横断（例へば）の天候の比較とか、僚艦某と別れた位置とか等々々、自然力に依存する事より大なりし當時の航海に於て、此の種日誌の重要性は、各人の常識と成り居りたるべく、随つてストックテール大尉が、熱情を以て本誌を記入されたと断定しても無理は無いと思ふ。（本文の記者も百年後の千九百六年より約三十年間の航海日誌を作り居れり）。

然らば本艦備付けの日誌はどう成つたであらうか？或はブリマウス軍港か、グリニツチの海軍倉庫の屋根裏にでも残つて居るであらうか——英國の三笠艦たるネルソン提督のピクトリーとでも申すなら、或は大切に保存されてあるかも知れぬが、一東洋艦隊の帆装軍艦の航海日誌がそう大切に保存してあるとは考へられない。吾等日本人には有名なフェイトン號だが、彼には至極平凡な一木造艦たるに過ぎないから。

それから本艦乗組の士官は彼れストックテールのみでは無いから、同じく航海日誌を作つて居た士官が他にも有つたらうと考へなくてはならぬ。無論他の士官が日誌を製作したに相違あるまいと思ふが、然しそれ等は百三十年後の今日どう成り果てゝゐるか——流矢、焼矢、滅失何れとも計り難いのである。それゆへ博物館所蔵の現日誌は、今日に残れるフェイトン號唯一の日誌だと断定は致し兼ねるが、最もそうらしいと思はれる理由は前述の通りである。假りに百歩を譲つて、本艦備付のものなり、他士官によりて作られたものが、今日只今見出されたとしても、それが爲に本日誌の價值を低下さるものではない。

次に本日誌の記者ストックテール大尉は、世にも稀なる筆達者で、其の筆蹟の鮮かな事談嘆之を久うすと云ひたいくらいで、篇額や對聯などの漢文字に見る所謂氣品とか、潤ひとか形容すべきものを、多分に持ち合せて居るやうに感ぜられてならぬ。横文字と申せばタイプライターで叩いても、印刷しても實用以外一歩も出ずと思つてゐたのに、百三十年前には斯くも美はしい文字藝術を有してゐたとは誠に床しい。——床しい事は床しいが、頗付きの達筆丈に其の判讀が亦た頗る難しい。第一に花文字の亂用と其の花文字のLとSと、T J Iとが殆んど區別出来ないのと、小文字ではu wのn mの混合などはまだよろしいとし、ie er ec rrなど亂脈にて判讀を妨げ、其の上へaの字の口を締りなく大きく明けてuと區別無いまでによく惡癖ある事を發見する迄には随分苦んだ。此んな達筆はもう御免だと思つた。味も潤も入らぬ床しく無くともよろしい。解の分らぬ達筆よりも読み易い惡筆に限ると、少々ストックさんが恨めしく成つた。幸ひ船内作業や船体船具の名稱なら御手のもの、海軍用語だから、其の片鱗さへ窺へば直ぐ判讀出来るが、地名と人名とでは随分惱まされた揚句大抵は征服したが、結局どうしても讀めない字も三字や五字は残つておつた。之等は何れ日を更めて檢討を重ね度と思ふ。

次に日誌を讀み始める前に是非念頭に入れて置くべき事は、第一當時の歐洲の形勢である。奈翁帝位にあり、大陸に於ては正に彼の極盛期に當り、列強は大陸の戦争に没頭してゐる間に、印度から已に佛の勢力を追ひ拂つた英國は、之を據點として營々支那へ進出の觸手を延ばすべく虎視眈々。實に英國海軍省の眼は當時已に太平洋に沿がれて居たのである。

もう一つの重要な要件と云ふのは、當時は機械革命、産業革命を知らなかつた時代の出来事である。随つて船内で機械力を應用したものとては滑車と、ポンプぐらひを除いたら何にも無いであらう。現代人の頭では容易く想像は出来ないだらうと思はれる。航海の原動力は、風力による純帆船であり、鐵工業が幼稚だからワイヤローフも出願せず、錨鎖も無いので不自山の錨索を用ひてゐる隔世の感と申す言葉など正に斯う云ふ時代に用ふ可きでは無からうか。

航海日誌記載方法に就て申すならば、さすがに軍艦文々に實に一条糸れざる記載振りで、大抵の商船ならば何とも書き様なしと空白にして置きそうな處も刻明に記入してある事と、其の記載には海軍用語を巧に使ひこなし、簡短と明瞭の双方を尖はざるところ將に航海日誌記載法の奥義と申してよろしからう。

最後に本日誌記載中の本艦の航程の概略を述べて本稿を終る事にしよう。即ち前記の如く千八百八十七年七月十日印度のマドラスを出帆一路ベンガル灣を東に、同月廿六日から廿八日までマラツカ錨地に碇泊して敵情を探りつゝ翌月八月十日に澳門に着き、必要な修繕をしたり、船底を洗つたり、薪水食料を積込んだり用意萬端整へて、二十日後の八月三十日に澳門を出帆、臺灣海峡を一路北上して九月十日には、長崎の南西五百海里の地點に達し、それから五島の沖合をウロウロ、パタビヤに歸る和蘭船が、日本貨滿載で我哨海網に懸つて呉れる事を期待しつゝ、血眼の軍閥準備の廿五日目、飲料水も食料も乏しくなつたのでとうとう見切りをつけて長崎港へ突入して來た。早速三艘の短艇を武裝して港内を偵察させたが、克戒が三艘居たのみで、和蘭船の影は見えなかつた。ペーリユー艦長以下の失望想ふべしである。それから食料補給にスツタモンダを重ねた揚句少量を得たので、十月六日長崎出帆折からの北東信風を追手に疾走を続け、早くも十月十二日には澳門へ歸着してゐる。本日誌の記者ストクデル大尉は能く全ページを費して長崎觀と日本人觀を掲げてゐる。其の全部を無條件で肯定はせぬが、慧眼な彼の觀察多くは正鵠に價するものがある。

澳門では、東印度會社船五艘と僚艦ラツスル號も居合せた。歳の瀬も迫る十二月廿三日彼等は、隊伍堂々護送船團を組織して南支那海を南下、遂に敵艦影を發見し得ず一月二日にはマラツカに、同八日にはベナン港に着いてゐる。それから一ヶ月後の二月八日にカルカッタに向け拔錨。航海中は敵艦近しと言ふので緊張を続け乍ら三月十五日漸く目的に着く、ビナン以來船内衛生状態甚だ悪しく、多數の赤痢患者横出の有様で死亡者と犯罪受刑者の數々目立つて多く成つて來た。壞血病の豫防法が發見されて居たので、その患者の多くなかつた事は未だしもの幸と云ふ可きだらう。

カルカッタでは、四月一日船内から出火して一時は大騒をしたが消し止め、入渠修理も豫料意外に長引いて七月八日漸く準備整ひて拔錨、その月の廿二日マドラスに着く、ベンガル灣を南に下ると相不變物情は驟然だ、佛艦に追はれたとて僚艦のコレネリヤと申すのが前中樞を傷めて翌朝入つて來る。スワと計りに其の日の午後彼を隨へて、東へ東へと敵艦を追つて八月七日遂にビナンに着いた。此の地で食料の補給や必要な修理を了へ、僚艦ノツチンガムを伴つてマラツカに到り、八月三十日から九月六日まで索敵情報を探り、今度はノツチンガムと別れてパーセピランスと、バラコンタの二艦と共に支那海を北に向つて居るが、マラツカを出てから八日目のところで日誌は大尾となつて居る。

斯う見て來ると、一卷の航海記を讀むやうだが、更らに日々^の出來事に觸れて行くと、一層切實に其の琴線に觸れるものありて、身親しく本艦に在りて楠風沐雨敵を索めて航り廻つてゐる思ひがする。當時澳門以外は白紙であつた。支那はどう有らうとも、自國が最惠國の特權を握らなければならぬとは、只單に一フェイトン號の行動から見ても歴然たるものあり、然も其の半面には著しくマラツカ海峡の夜半ハンモックの夢結ぶに難く、配給のアラック(燒酎)を飲んでは無理に寝る。飲み過ぎれば罰である。飲まなければ寝られない。非直に寝ない揚句は當直の作業に影響する。作業を怠れば之れまた罰である。其の罰は馬を鞭つ如くに鞭つ、輕重に應じて二ダースから四ダースも鞭たれたのである。世人奴隸制度の非人道を説くが、英國は其の東洋制覇の野望を達する爲には忠良な臣民ジャック君、ター君、シェルバック君等を、斯くも奴隸の如くに虐使して來たのである。本日誌記載中の一年二ヶ月餘の間、日曜日の休暇を頂いたのはたつた二回、

カルカッタ碇泊中に於てのみ、天長節の祝典にすら満艦飾をし皇禮砲は放つたが、水兵は作業から解放されなかつた。海を制する者は世界を制すると云ふ、其の海を制する爲に英國は國家として多大の犠牲を支拂らひましたらうが、當時海に活きた者の生活の半面には斯くも悲惨なものが有つた。更らに半世紀遡つて千七百五十年に達するまでの航海には、乗組の過半数は壞血病で倒れるのに相場は決つて居たのである。當時とは時間的には百三十年の距りが有り、乾隆の盛代を見送つたばかりの支那、開國前の日本、と變るものは急速に變つて居るが一向に變つて居ないものもある。私は之の日記を通じて一片の昔談以上のあるものを訓へられたやうに感ずるのである。

(終)